

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可  
平成二十九年三月一日發行 每月一回一日發行  
第九十五卷第三号(二月十日發売)

# 文藝春秋

芥川賞発表 受賞作全文掲載

山下澄人「しんせかい」

著名人60名  
アンケート 安樂死は是か非か / 特別対談 橋田壽賀子×鎌田實 三月特別号





## 大特集「理想の逝き方を探る

# 安樂死は是か非か

大アンケート

本誌編集部

著名人60名の賛否を公開する

橋田壽賀子の記事  
脚本家の橋田壽賀子さんの論考  
「私は安樂死で逝きたい」  
(本誌二〇一六年十一月号)  
大きな反響を呼んだ。  
超高齢化社会に突入し、  
死が身近になる時代、  
終末期の理想とはどんな形なのか。  
アンケートから海外ルボまで、  
様々な角度から考えたい。



本誌二〇一六年十二月号に掲載された、脚本家の橋田壽賀子氏（91）の論考『私は安樂死で逝きたい』

は、大きな反響を呼んだ。

「私は八十歳を過ぎた頃から、もし認知症になつたら安樂死がいちばん

と思つています」

〈介護離職して面倒をみていた息子

が絶望して寝たきりの親を殺した

り、老老介護の果てに無理心中とい

つた胸の痛むニュースを見るたび

に、安樂死の制度があればそうした

悲劇も防げるのに、と思うのです〉

〈日本でもスイスのように安樂死を

認める法律を早く整備すべきだと思つています〉

橋田氏が行つた問題提起は、テレ

ビや雑誌、インターネットサイト等

で数多く取り上げられ、瞬く間に世

間に拡散した。

また同時に、編集部には、読者か

らの手紙が数多く届いた。

助かる見込みのない死期の迫った

こう。

死・尊厳死の状況について触れてお

こ。

九八年には、川崎協同病院でも、医

師が低酸素脳症で意識障害のある患

者の気管内チューブを「家族の要請

があった」という理由で抜管し、筋

弛緩剤を投与して死亡させた事件が

発生。医師は殺人罪で逮捕され、○

「今こそ覚悟を決めて、オランダのように安樂死の議論をすべきです。

勇気ある発言をした橋田先生に敬意を表したい」（六十七歳・男性）

「記事を読んでいて、お医者様に『痛いのは嫌です。痛くないよう、楽に死なせてください』と懇願して

いた祖母の姿に重なつた」（四十七歳・女性）

「日本は安樂死、尊厳死の議論と実施について、欧州に比べて二歩も三歩も遅れている。これは政治家の怠慢だと思う。橋田さんの主張が一石を投ずることを切に願っている」（七十五歳・男性）

「読者も、安樂死についての問題提起を、我が事として受け取ったこと

が読み取れる。

ここで簡単に、日本における安樂

死・尊厳死の状況について触れてお

こ。

アンケート結果(回答総数60)	
安樂死に賛成 (33人)	浅利慶太、伊東四朗、大沢悠里、大林宣彦、角川歴彦、金子兜太、岸田秀、久坂部羊、倉本聰、吳智英、小林亞星、三枝成彰、堺屋太一(※)、澤田隆治、澤地久枝、杉良太郎、妹尾河童、橋玲、筒井康隆、中村邦夫、丹羽宇一郎、野口悠紀雄、橋本治、畠村洋太郎、浜村淳、ピーコ、楳原稔、水木楊、水谷研治、無着成恭、山川静夫、山田太一、湯川れい子
尊厳死に限り 賛成(20人)	あさのあつこ、猪谷千春、今井敬、内館牧子、海老沢勝二、岡井隆、尾崎護、金美齋、棚橋祐治(※)、中島誠之助、坂東眞理子、樋口武男、藤原正彦、保阪正康、堀江謙一、宮内義彦、森本敏、柳田邦男、山折哲雄、渡辺貞夫
安樂死、尊厳死 に反対(4人)	上野千鶴子、篠沢秀夫、外山滋比古、横尾忠則
選ばず(3人)	秋山豊寛、伊東光晴、ちばてつや

(※は条件付き、本文を参照)

かつたと考えても、驚きの結果だ。Aを選択したほぼ全員が、この問題を「自分の経験」に照らし合わせ、「自分に起こりうること」とし

て捉えていた。そして、理由として最も多かったのは、「人には、自分の死を選ぶ権利がある」という主張だ。

かつたと考へても、驚きの結果だ。Aを選択したほとんどの人が、この問題を「自分の経験」に照らし合わせ、「自分に起こりうること」として捉えていた。

九年に最高裁で有罪が確定した。終末期の医療の現場において、延命治療の止め方など、どこまでが法的に許されるのか判断が難しい。事件化されるケースが続く中、医療現場では不安が広がった。

そうした背景もあり、一二年、超党派の「尊厳死法制化を考える議員連盟」が、終末期の患者が延命治療を望まない場合は延命措置の中止をした責任を免除することなどを盛り込んだ法案を公表した。しかし、個人の死に国が介入することへの反発もあり、法案提出に至っていない。

今回の特集記事のいくつかをお読みいただければ分かるように、延命治療を行わない、いわゆる「自然死」と呼ばれる死に方については、すでに日本国内でも特定の現場では定着し始めている。法整備に比べ、現場が先行しているのが実情だ。海外のケースはどうか。詳細は各

は、各国(州)がそれぞれ厳格な基準を作っている。「尊厳死」については、アジアでも近年、韓国や台湾で法制化された。認められている。実施にあたっては、各国(州)がそれぞれ厳格な基準を作っている。「尊厳死」については、アメリカのカリフォルニア州などでは、各国(州)がそれぞれ厳格な基準を作っている。「尊厳死」については、アジアでも近年、韓国や台湾で法制化された。

### 過半数が「安樂死」に賛成

橋田氏の論考への反響の大きさを考慮すると、超高齢化社会に入った日本においても、これまでタブー視されてきた「安樂死」や「尊厳死」について、真剣に議論する時期を迎えているのではないか。

そこで、各界の有識者に「日本は安樂死を認めるべきか」というテーマのアンケートを実施することにした。内容は、次のようなものだ。

この三つの選択肢から、一つを選んで、その理由を併記してもらうといふもの。今回のアンケートにおいては、「安樂死」の定義は「回復の見込みのない病気の患者が薬物などを服用し、死を選択すること」、「尊厳死」の定義は「患者の意思によつて延命治療を行わない、または中止すること」とした。

アンケートは、本誌の寄稿者を中心、百四十六名の有識者に送付。六十名から回答が寄せられた(回答の内訳は、次頁の表を参照)。

アンケートの結果は、過半数の十三名が、Aの「安樂死に賛成」を選んでいた。この問題について積極的な意見を持った人の方が回答しやす

- A、安樂死に賛成
- B、尊厳死に限り賛成
- C、安樂死、尊厳死に反対

（生れた時はともかく逝き方を選ぶ権利はあつてもよいのでは、と思いまます。Bの尊厳死は、その日迄何も出来ずに苦悶の病人をただ見てるだけの家族が辛過ぎます）（伊東四朗氏）

もう一つ、「周りの人々に迷惑をかけたくない」という趣旨で選択する人もかなりの数にのぼつた。

（これまでの自分の生に対しても、もはや自分は納得しています。（略）周囲に迷惑をかけてまで永生きしようとは考えません）（倉本聰氏）

（もし認知症になつたら、安樂死がいい。まわりの人（家族だけでなく）にかかる迷惑は最少で食い止めもらいたい）（無着成恭氏）

Bの「尊厳死に限り賛成」を選択したのは二十名。理由の多くには、

人為的に“生きる苦しみ”を排除することへの理解は見せつても「恣意的に命を奪う手法」としての安樂死への抵抗感が滲んでいた。

（日本の現状では、安樂死と尊厳死、さらには自殺と自殺帮助などの線引きがきちんとできるのかどうか不安です）（あさのあつこ氏）

（延命を望まないことと、自死を望むことの差は大きい。許されるのは尊嚴死までという気がします）（尾崎護氏）

安樂死は社会的・道義的に問題があるという見解も見られた。

（安樂死は「自殺」又は「他殺」の変形ではないでしょうか。（略）社会的にも課題があると思います。

尚、認知症になつた人を安樂死させることは、罪の意識を残すか或いは犯罪ということではないでしょうか（宮内義彦氏）

（認知症になつたりしたら、即安樂死）

## 安樂死アンケート 60名の回答

(五十音順)

秋山豊寛（74、宇宙飛行士）

（問1）選ばず

（問2）小生、橋田氏の文章を読んでおりません。また、こうした問題はアンケートで答えるテーマなんか、考えてみたいので、回答は保留させていただきます。

あさのあつこ（62、作家）

（問1）尊厳死に限り賛成

（問2）とても難しい問題で、正直選びきれない思いです。わたしが患者本人なら、自分の意思で自分の生涯に決着をつけたいと思うような気がします。家族であろうと医療関係者であれうとその決定の責任を他者におしつけても、委ねてもならない

死というのでは、世代間で引き継がれるいのちの精神性を切斷してしまう。現代の合理主義の極致と言ふべきだろう（柳田邦男氏）

### 「人間だけが特別ではない」

Cの「安樂死、尊厳死に反対」を

選んだのは四人。死とは、すべての生物にとつての自然の摂理であり、

人為で変えてはならない——という

のは、次のふたり。

（生まれる時も生まれ方も選べないのに、死に時と死に方を選ぶのは人間の傲慢）（上野千鶴子氏）

（生き物は全て自然死するようになつてゐる。人間だけが特別ではない）（横尾忠則氏）

A L S（筋萎縮性側索硬化症）という難病と闘つてゐる学習院大学名誉教授の篠沢秀夫氏からは、次のように回答が寄せられた。

（平成）二十一年四月には人工呼吸器を着ける決心をして、この病気を負けまいとの思いで暮らして来ました。最後まで闘いぬくという覚悟で呼吸器を着けたので、安樂死など病気に負けることになるので絶対に望みません。考えることもありません。

（平成）二十一年四月には人工呼吸器を着ける決心をして、この病気を負けまいとの思いで暮らして来ました。最後まで闘いぬくという覚悟で呼吸器を着けたので、安樂死など病気に負けることになるので絶対に望みません。考えることもありません。

敢えてこの問い合わせに回答しなかつた人も三人いた。

（制度化すると人間の生存権にかかることになりできません）（伊東光晴氏）

（ここ）の様な難間に答えを出すのが人間である、という事に不安を覚える（しばてつや氏）

六十名の回答と、綴られた理由は、その人が抱く「死生觀」や「人生觀」が色濃く反映されている。誰一人として同じ理由はなく、胸を打つ内容のものが多かつた。次頁からその回答を掲載する。

（問1）尊厳死に限り賛成  
（問2）家族にかける迷惑を最小限におさえる為。

伊東四朗（79、喜劇役者）

（問1）安樂死に賛成

（問2）橋田先生のお考えを支持します。今年八十歳になる予定の小生にとってタイムマリー？なテーマでビックリ。生れた時はともかく逝き方を選ぶ権利はあつてもよいのでは、と思います。Bの尊厳死は、その日迄何も出来ずに苦悶の病人をただ見てるだけの家族が辛過ぎます。出来れば家族で大笑いした晩御飯の翌朝その笑顔を少し残したまま永眠して、いた、と言うのが理想ですがね。

（問1）選ばず  
（問2）自分が選べるとしたら安樂死も尊厳死も賛成ですが制度化する

猪谷千春（85、国際オリンピック委員会名誉委員）

（問1）安樂死に賛成  
（問2）回答なし

伊東光晴（89、経済学者）

（問1）選ばず  
（問2）自分が選べるとしたら安樂死も尊厳死も賛成ですが制度化する

と人間の生存権にかかわることになります。難しい問題です。

**今井敬** (87、新日鐵住金名譽会長)

(問1) 尊厳死に限り賛成

(問2) 患者自身の意思で治療を行わない、または中止することを選択する尊厳死は、患者本人の明確な意思表示がある、かつ、死に至る回復不可能な病気・障害の終末期で死が目前に迫っている等の条件のもとでは、自然死に相当するものとして許容できる。

安樂死については、他者（医者など）が死に至らしめる施術（薬物を服用など）を行うものであり、恣意性を排除するためには患者に回復の見込みが無いことを完全に立証できることが前提と考えるが、日々医療技術は進歩している訳であり、安樂死を容認することは難しいだろう。

**上野千鶴子** (68、社会学者)

(問1) 安樂死、尊厳死に反対

(問2) 生まれる時も生まれ方を選ばないのに、死に時と死に方を選ぶのは人間の傲慢。「生きるに値しない生命」を選別する根拠になる。

尊厳死と安樂死とのあいだはグレーゾーンで境界がつけられない。本人も周囲も最期の最期まで迷い、悩みぬけばよい。

**内館牧子** (68、脚本家・作家)

(問1) 尊厳死に限り賛成

(問2) 死は本人だけのものではなく、遺された人のものもある。本人は「積極的な死」に満たされても、遺された人はその「自死」が一生頭から離れないだろう。

**海老沢勝二** (82、元NHK会長)

(問1) 尊厳死に限り賛成

(問2) 尊厳死を希望する。意識が

あり、善悪等の判断ができるかぎり、人為的な治療を行わず、自然の成り行きにまかせて終末を迎えたい。

**大沢悠里** (75、フリーアナウンサー)

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 安樂死の中に尊厳死も含め周囲も最期の最期まで迷い、悩みの意思により、延命治療は行なわず、患者の意思すべてに於いて認識が無い場合、病院、家族、第三者など複数により決定する。最期こそ苦痛なくして迎えたい。人間らしく終りたい。

**大林宣彦** (79、映画作家)

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 正しくは「死こそは当人の自由であるべき」です！死こそは、自身の「表現の自由」の最後の砦だと信じるから、何ものにも拘束されにはなりません。

族の人々の合意と決断、医師の判断が必要になりますが、延命を望まないことと、自死を望むことの差は大きい。許されるのは尊厳死までとあります。死こそは、それが両親からの授かりものと考へるにせよ、神（または天）からの授かりものと考へるにせよ、単なる自分の持ち物ではなく、いろいろな責務を伴つてゐる所以、軽々に捨てる事が許されないと考へます。安樂死は死に方の選択の問題であるようにも思えますが、やはり「殺人」の範囲に含まれるように思われますので（嘱託殺人という言葉があります）、それを認めることにはためらいがあります。尊厳死と安樂死は紙一重の差に見えますが、尊厳死には殺人という積極的行為はありません。いわば神の手にゆだねるだけです。もちろん親

**角川歴彦** (73、KADOKAWA会長)

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 七十三歳の僕がそう思うからです。

**金子兜太** (97、俳人)

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 自然死に近い死に方が好みということで、ごくあつさりと死にたいのです。

**岡井隆** (89、歌人)

(問1) 尊厳死に限り賛成

(問2) 周辺に迷惑をかけず静かに死に赴きたい。かといって人間性を無視した扱いはうけたくない。

**岸田秀** (83、心理学者)

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 周辺に迷惑をかけず静かに死に赴きたい。かといって人間性を無視した扱いはうけたくない。

(問2) 見栄つ張りなので、死ぬ間際の見苦しい姿を人に見られたくない。

**金美齡 (83、評論家)**

(問1) 尊厳死に限り賛成

(問2) 安樂死は自殺行為なので実行するつもりはありません。少子高齢の日本は年寄りが自らの幕引きをいかに「美しく」するのかが問われています。理想は生涯現役、ピンピ

ンコロリですが、「神のみぞ知る」ので、せめて尊厳ある最後を迎えるべく、延命は無用と、娘と息子に嚴命しています。但し、息子は「やつてみなければ、助かるかどうか、分らないじゃないか」と……。中々、お互いに割切れる問題ではないようです。いずれにせよ、医療費は「大赤字」だと言うこと、一人ひとりが正面から受止めるべきです。

で、安樂死の合法化を実現したいと思います。高齢化社会の到来によつて、安樂死の実現は仮定の問題ではなくなりつつあります。母の最期を思い出すにつけ、私自身も安樂死で逝きたいと思います。

**小林亜星 (84、作曲家)**

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 自分があく迄自分で在る権利を守る為。

**三枝成彰 (74、作曲家)**

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 現在、自分で八十八歳までの作曲計画を立てています。それを達成したら、それ以上は長生きする理由がないからです。

**堺屋太一 (81、作家)**

(問1) 安樂死に賛成 (※消極的安樂死のみ賛成)、尊厳死に限り賛成

**久坂部羊 (61、作家・医師)**

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 当人にも家族にも、安樂死が望ましい状況 (悲惨な延命治療や、あまりに非人間的な難病・超高齢状態など) が厳然として存在するかぎり、選択肢としての安樂死は必要です。苦痛からの解放と、当人の尊厳のためには、それ以外に方法がない場合があるからです。はじめからはうまくいかないでしょうから、試行錯誤の安樂死を闇に葬らず、知見を積み重ねるべきだと考えます。望ましい安樂死を実現するためには、早急にオランダのように専門家を育成し、専門施設を作る必要があると思います。

**倉本聰 (82、脚本家)**

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 死というものに、もはや恐れは抱いていません。これまでの自

分の生に対する、もはや自分は納得しています。別れの悲しみは無論ありますが、周囲に迷惑をかけてまで永生きしようとは考えません。自分の現在の唯一の恐れは、死ぬ時の苦しみ、只それだけです。医学というものが進歩したのなら、延命より楽つと人道的行為だと、私は心から考えています。その時が来たら、安樂死を望みます。

**吳智英 (70、評論家)**

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 二〇一六年の年末に母を亡くしました。九十一歳でした。この一年間は、激痛と不安に苦しみ、見ているこちらもやりきれませんでした。死にたい、殺してくれ、と言われるたびに、安樂死が可能なら、そうしてやりたいと思いました。本の意志確認など法整備をした上

(問2) 自分が苦痛で判断できない場合、延命措置を中止して安らかに死なせて欲しい。但し、死が確實で目前 (この解釈は難しい) に迫った場合に限る。

回復の無いまま長く生かされるのは苦しいと思う。また、妻などにも迷惑をかけ、費用もかかりすぎる場合がある。十分な意思確認 (意識の無い場合は、回復の見込みのないこと) を複数の医療機関と肉親が了解) をして、安樂死を許すべきだ。

**澤地久枝 (86、作家)**

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 生れることは選べなくて死ぬときは、自分らしくと思います。自然に安樂死を選んだ人を知っています。人生のみごとな完結でした。

**澤田隆治 (83、メディアプロデューサー)**

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 三年前、内視鏡の検査で大腸ガンが発見され、モニターを見ながら操作していたドクターが「あつ、ガンだ」私が「えッガンですか」とドラマで見たこともないようなガンの宣告を受け、笑ってしまった。殆んどショックがなく手術を受け

**篠沢秀夫 (83、学習院大学名誉教授)**

(問1) 安樂死、尊厳死に反対

(問2) 主人は「何でそんなことを聞くの?」という返事でした。全く考えてもいいとのことでした。平成二十年十二月十五日に東大へ筋電図などの闘いが始まりました。翌二十一

年四月には人工呼吸器を着ける決心をして、この病気に負けまいとの思いで暮らして来ました。最後まで闘いなくという覚悟で呼吸器を着けたので、安樂死など病気に負けることになるので絶対に望みません。考えることもあります。

弥先生の研究に期待して、医学の進歩を信じて頑張って行きたいです。ALSという病がこの世から消えるまで闘いたいです。それでもTBSドラマ「JIN—仁—」の様に百年後の世界からお医者様が来てALSを治して下さらないか?と夢を見つつ毎日病気と闘つて来ました。進行性の病気なので現実は甘くあり

ませんがともかく闘い続けたいと思います。(※妻が代筆)

**杉良太郎 (72、歌手・俳優)**

(問1) 安樂死に賛成

について自分で決めるのが自然な流れと思います。自分自身が死について判断できる間にこれを遺言しておくことが大事だと考えます。薬や機械で、ただ、生かされている、とうのは何よりも苦痛だと思います。

**妹尾河童 (86、舞台美術家・エッセイスト)**

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 僕の父親は八十五歳で転倒骨折して入院。その後寝つきり状態になりました。担当の医師に、治る見込みを聞くと、「正面玄関から退院は出来ませんね」と云いました。つまり死を待つしかない状態なの

に、生きている時間を伸ばすためだけの、「延命治療」を中止する事ができないのです。父親の意識はハッキリしていて、「もう充分に生きてきた」今までお世話になつた人の名前を一人ずつ上げて、「謝意を伝えてほしい」と頼んでいました。そして、「このチューブも酸素吸入も外してもう事を先生に頼んでほしい」と訴えました。しかし、医師は、「ご本人やご家族から、どんなに頼まれても、それをすると、僕は殺人罪に問われます」と応えました。確かに三十年前は、そうだったでしょう。父親の死後、我々夫婦は、『日本尊厳死協会』の存在を知り入会しました。「安樂死」と『尊厳死』は全く違いますが、「治る見込みがないのに、延命のためだけの、医療行為」を拒否する」という、本人の意思が健全であるうちに、署名宣言することで入会できます。

場合、改善の見込みがなければ、その時点で、取り外してください。

(6)ただし、苦痛を和らげるために、麻薬などの適切な使用により、充分な緩和医療を行つてくださるよう、お願い致します。

以上のこととは、精神も肉体も健康

な時に記したものであります。

私の願いに従つてくださった方々に感謝すると同時に、その方々の行為の責任は、全て私自身にあること

を付記いたします。

2017年1月1日 妹尾河童

**橘玲 (作家)**

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 自分の人生を自分で決めるのが自由な社会なのだから、死の自己決定権を認めるのは当然。高齢者だけでなく、オランダのように、十

六歳以上であれば未成年でも安樂死の自決権を、十二歳以上十六歳未満

出来つつあります。それらの積み重なりで、医師が告訴されたり、罰せられることが無くなりました。僕は八十六歳ですが、毎年、別紙の様な宣言書を書いています。

(別紙)

(2)原因のいかんを問わず一度心臓が停止した場合、蘇生術はほどこさないでください。

(3)口からの栄養摂取が不能になつた時は経管栄養、中心静脈栄養、末梢静脈輸液は行わないでください。

(4)人工透析もお断りします。

(5)もし、人工呼吸器が装着された

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 自分の人生を自分で決めるのが自由な社会なのだから、死の自己決定権を認めるのは当然。高齢者だけでなく、オランダのように、十

**あなたの本を出版します**

原稿をお送りください。あなたの本が書店に並びます。応募方法はホームページ。

http://www.tokyotosh.co.jp

Your partner for publication  
東京図書出版  
since 1977

理工医学専門書から経済・美術・小説までジャンルは問いません。

〒113-0021 東京都文京区本駒込3-10-4  
東京図書出版 文春係  
03-3823-9170 FAX 0120-41-8080  
http://www.tokyotosh.co.jp

原稿送付・問い合わせ

なら保護者の同意で安樂死できるようすべし。

**棚橋祐治** (82、シティユーワ法律事務所弁護士・石油資源開発相談役)

(問1) 尊厳死に限り賛成 (ただし、嘱託承諾殺人罪 [刑法二百二条] の適法性を阻却する条件の整備が前提)、安樂死に賛成 (ただし、同意殺人罪 [刑法二百二条] の違法性を阻却する条件の整備が必要)

(問2) 全く個人的経験ですが、私の妻の父親が脳溢血で意識不明になりました。人工的な装置による栄養補給で七年間病床にありました。私を含めた息子などの介護に携わる人にも、常にまぶたを閉じて反応は全くありませんでした。しかし、娘にあたる私の妻が耳元で「帰ってきましたよ」というと、それにだけは目をかけて反応をするのです。担当医も娘さんの声だけが脳細胞に残つて

(問2) 全く個人的経験ですが、私の妻の父親が脳溢血で意識不明になりました。人工的な装置による栄養補給で七年間病床にありました。私を含めた息子などの介護に携わる人にも、常にまぶたを閉じて反応は全くありませんでした。しかし、娘にあたる私の妻が耳元で「帰ってきましたよ」というと、それにだけは目をかけて反応をするのです。担当医も娘さんの声だけが脳細胞に残つて

(問1) 選ばず

(問2) 自分自身の問題として考えたならばB (尊厳死に限り賛成) に近いが、この様な難問に答えを出すのが人間である、という事に不安を感じる。

**筒井康隆** (82、小説家)

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 日本でも早く安樂死法案を通してもらうしかない。日本でなん

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 日本でも早く安樂死法案を通してもらうしかない。日本でなん

APIO』二〇一七年一月号より引用)

(問2) 単に呼吸しているだけでは、生きていることにならない。

**丹羽宇一郎** (78、日中友好協会会長)

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 回答なし

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 安樂死に賛成

**野口悠紀雄** (76、早稲田大学ファイナンス総合研究所顧問)

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 天命は人為の侵すものにあらず。本人の意志と体力の命ずるままに任せよ。

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 「死の選択」も、個人の自由のうちに含まれると考えるからです。私自身が将来直面するであろう問題として、安樂死が可能になるよ

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 回答なし

**中島誠之助** (78、古美術鑑定家)

(問1) 尊厳死に限り賛成

(問2) 天命は人為の侵すものにあらず。本人の意志と体力の命ずるままに任せよ。

**外山滋比古** (93、英文学者)

(問1) 安樂死、尊厳死に反対

(問2) 回答なし

**しばてつや** (78、漫画家)

いるのですね」と驚いておられました。周囲に人工医療装置をとりはづきていると強く反対し、自然死するまで、七年間週のうち半分くらい東京から岐阜の病院に通いつめました。人の命の神秘性を強く感じたことです。

とか認められているのは一種の尊厳死で、これは自然死とも言われています。治療を絶つことによる苦痛が伴うから安樂死ではない。やれやれ。やはり苦痛なしに死ぬというのは日本では至難の業であるらしい。おれにとつての楽しみといえば、まだ未体験のモルヒネを打つてもらうくらいのものか。こうなれば次のように嘯いて自分を宥めるしかあるまいね。「せつかく生きて来たんだから、死の苦痛というものを味わわずに死ぬのは損だ」

だって昔は医者もあまりおらず、たいていの人は自分の家でもがき苦しんで死んだんだもんな。それに比べれば苦痛を和らげる薬を貰いながら死ぬ方がずっとましというものであろう。(※筆者の意向により、「S

うな社会(法的に許容されるだけでなく、人々が通念としてこれを許容し、医療技術的にも楽な方法が開発されること)の実現を強く希望します。この問題についての議論が起こることを希望します。

**橋本治** (68、小説家)

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 老齢を避けたかつたら、人の手を借りずに自殺すればいいのに

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 「死の選択」も、個人の自由のうちに含まれると考えるからです。私自身が将来直面するであろう問題として、安樂死が可能になるよ

うに思います。ただ「すぐ死ぬ安樂死」ではなくて、三月くらいかけて段階的に生理機能が麻痺して行く安樂死であつてほしいと、生と死と老いの尊厳を考えています。

**畠村洋太郎** (76、東京大学名誉教授)

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 自分の意志を明確に表現できるうちに表出された意志は尊重されるべきと考えるので。

**浜村淳** (82、タレント・映画評論家)

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 恐ろしい内容なので容易に発言できませんが、我身に例えて云つてみます。もし私(患者)の命が絶望的でありなおかつすさまじい苦痛におそれているとすれば、その患者を安樂にしてあげることも一つの「尊厳」ではないでしょうか。あるいは私が「生ける屍」状態になり

回復の見込みがないときも同じことを考えます。むざんではありますが……。

**坂東眞理子** (70、昭和女子大学理事長)

(問1) 尊厳死に限り賛成

(問2) 尊厳死というより自然死です。胃ろうなどスパゲッティ症候群や国民医療費を無駄づかいするような高度医療は望みません。

(問1) 理想としては、健康長寿で天寿を全うするのが望ましいですが、家族個人個人の考えで本人のために尊厳死を選択することは、許されてよいのではないかと思います。

**藤原正彦** (73、数学者・作家)

(問1) 尊厳死に限り賛成

(問2) 私も今一人で生活をしています。もし認知症になつたら、自分の判断が出来るうちに安樂死にしてほしい、と書き残すなり、録音なりしておきたい! 誰にも迷惑をかけない生き方を選びます。

**保阪正康** (77、昭和史研究家)

(問1) 尊厳死に限り賛成

(問2) かつて医学・医療の各種のテーマにとりくんだことがあった。その折りに『安樂死と尊厳死』(講

**樋口武男** (78、大和ハウス工業会長)

(問1) 尊厳死に限り賛成

社会としても、それを是認するほうが良い。

**宮内義彦** (81、オリックスシニア・チエアマン)

(問1) 尊厳死に限り賛成

(問2) 不本意で悲惨な末期医療を避け、苦痛のみを和らげながら死を迎える尊厳死は「個人の最後の望み」として認めるべきと考えます。但し安樂死は「自殺」又は「他殺」の変形ではないでしょうか。今のところ個人としてそれに賛成とする勇気もないし、社会的にも課題があると思います。尚、認知症になつた人を安樂死させることは、罪の意識を残すか或いは犯罪ということではないでしょうか。

**水谷研治** (83、名古屋大学客員教授)

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 「苦闘する生き様」が感動を呼ぶなどで周りに貢献することが受けられる。

まったく役に立たず、迷惑をかけるのみとなつた場合は安樂死、尊厳死を望む。それが「迷惑を少なくする」意味で最後で最大の「社会への貢献」と考えるからである。

**無着成恭** (89、僧侶)

(問1) 安樂死に賛成

(問2) 私たち夫婦は話し合つてお

一九九二年四月二十八日、日本尊厳死協会に入会しました。もし認知症になつたら、安樂死がいい。まわりの人は（家族だけでなく）にかかる迷惑は最少で食い止めもらいたいと話し合いました。

**森本敏**（75、拓殖大学総長・元防衛大臣）

（問1）尊厳死に限り賛成

（問2）人の生命は自らの意志によるものでなく、生まれ出することは人としての運命である。である限り、死に至る時もそれを運命にゆだねることが人として生きる道である。死を免がれ得ないという運命に至る時、その運命を自然体にませ、從容として死につくことが生物としての人間が正しく生きる途である。

**柳田邦男**（80、ノンフィクション作家）

（問1）尊厳死に限り賛成

（問2）私はこれまで死の作法については「延命治療死」ではなく、「断食往生死」でいこうと考えてきました。薬物を外部から体内に入するのではなく、断食という自己決定によって死につこうと考えていたからです。しかしそれが認知症の深刻化と増大化によつて難しい状況になつてきたようです。そのためともとの「断食往生死」を可能にするためには、さしあたりB（尊厳死）の選択しかなくなつてしましました。もつとも最期の最期の場面でどうなるかはわかりませんが……。

**山川静夫**（83、エッセイスト）

（問1）安樂死に賛成

（問2）私はかつて大病を患い、手術を受けた経験があります。麻酔を打つと、ぼんやりと次第に意識を失つていきますが、あのような死に方があ私の理想です。妻とは、お互に

（問2）私はかねて、「尊厳死」に對し、あえて「尊厳ある死」という用語を設定して、區別して使うべきだと提言してきた。「尊厳ある死」とは、死が避けられないとわかつてし合いました。

**森本敏**（75、拓殖大学総長・元防衛大臣）

（問1）尊厳死に限り賛成

（問2）人の生命は自らの意志によるものでなく、生まれ出することは人としての運命である。である限り、死に至る時もそれを運命にゆだねすることが人として生きる道である。死を免がれ得ないという運命に至る時、その運命を自然体にませ、從容として死につくことが生物としての人間が正しく生きる途である。

**柳田邦男**（80、ノンフィクション作家）

（問1）尊厳死に限り賛成

（問2）私はこれまで最高の仕事は、最終章の日々をどのように精神

人間として最大にして最高の仕事

「延命治療はやめよう」と話し合っています。私は色々なところで、「介護地獄」の凄惨さを見聞きしていますが、自らがあのような状況に置かれることを考えると、絶望的な気持ちになります。それだけは絶対に避けたい。そういう意味でも、安樂死には賛成です。

**山田太一**（82、脚本家）

（問1）安樂死に賛成

（問2）自分についてはそれでいいと思っています。思いがけず長生きして、と。よろしく、と。ただ回復の見込みがないと判断するのは他者ですからドンドン処理してしまうマイナスはあるでしょう。他人もそうさせよ、とはいえない。私の知らない生の神秘はあるかも知れません。ただこのようなテーマで言い合ははしたくありません。

**横尾忠則**（80、美術家）

（問1）安樂死、尊厳死に反対

（問2）生き物は全て自然死するようになつていて。人間だけが特別ではない。最期を自覚することでその人間のカルマが清算されると考えば、あえて死を全うするのが生の最終目的ではないのか。

（問2）私はかねて、「尊厳死」に對し、あえて「死後生」となって、それまでの人生を共有した残された人の心の中で生き続け、残された人の人生を支えたり膨らませたりする。病気が進んで意識が薄れたり、認知症になつたりしたら、即安樂死といふのでは、世代間で引き継がれるいのちの精神性を切斷してしまう。現代の合理主義の極致と言うべきだろう。緩和ケアの発達は、「神は耐えられない苦しみは与えない」という慈悲を現実のものにした。そういう中で死に行く者の苦しみ、ケアする者の苦しみは、人間の成長・成熟のためのプロセスなのだ。私は耐える期間を含めての「尊厳死」と、死に大きな意味をもたらす「尊厳ある死」を大事にする最終章を遺稿にしたい。

**山折哲雄**（85、宗教学者）

（問1）尊厳死に限り賛成

（問2）頭も心もしっかりとしている間に、遺言を書くように自分の死の在り方として「安樂死」が選べるならば、自分も周囲も社会もハッピーになれるのに……と思います。特に認知症と末期癌の時には、この自由と贅沢を！

**渡辺貞夫**（84、サックスプレイヤー）

（問1）尊厳死に限り賛成

（問2）回答なし